

マルコによる福音書 12 章 1 節～12 節

2017 年 11 月 29 日

古本 靖久

1、聖歌 186 番 「きよき朝に 主はよみがえり」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 85 ページ）

4、テキストの位置

マルコ福音書では、イエス様がエルサレムに入ってから三日目となりました。

今日の箇所ではイエス様は、祭司長、律法学者、長老たちと

エルサレムにて	月曜日	11:12-14	いちじくの木
		11:15-19	神殿とは
	火曜日	11:20-26	信仰と祈り
		11:27-33	神からの権威
		12:1-12	取り上げられる実り
		12:13-17	神のものは神へ

いうエルサレム議会の構成員に対して、ぶどう園のたとえを語られます。旧約の時代からイスラエルは、いちじくの木やぶどう園としてたとえられてきました。

◆ぶどう畑の歌

わたしは歌おう、わたしの愛する者のために そのぶどう畑の愛の歌を。わたしの愛する者は、肥沃な丘に ぶどう畑を持っていた。よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。その真ん中に見張りの塔を立て、酒ぶねを掘り 良いぶどうが実るのを待った。しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。さあ、エルサレムに住む人、ユダの人よ わたしとわたしのぶどう畑の間を裁いてみよ。わたしがぶどう畑のためになすべきことで 何か、しなかったことがまだあるというのか。わたしは良いぶどうが実るのを待ったのに なぜ、酸っぱいぶどうが実ったのか。さあ、お前たちに告げよう わたしがこのぶどう畑をどうするか。囲いを取り払い、焼かれるにまかせ 石垣を崩し、踏み荒らされるにまかせ わたしはこれを見捨てる。枝は刈り込まれず 耕されることもなく 茨やおどろが生い茂るであろう。雨を降らせるな、とわたしは雲に命じる。イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑 主が楽しんで植えられたのはユダの人々。主は裁き(ミシュパト)を待っておられたのに 見よ、流血(ミスパハ)。正義(ツェダカ)を待っておられたのに 見よ、叫喚(ツェアカ)。(イザヤ 5:1~7)

イエス様はイスラエルの指導者たちに対して、何を語ろうとしたのでしょうか。そしてその言葉は、わたしたちに何を伝えているのでしょうか。見ていきたいと思います。

5、節ごとに

◆取り上げられる実り

12:1 (そして) イエス (彼) は、たとえで彼らに話し (語り) 始められた。「ある人がぶどう園を作り、(周りに) 垣を巡らし (設け)、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して (委ねて) 旅に出た。

前回読んだ 11 章 27 節では、イエス様は神殿の境内で祭司长、律法学者、長老たちと「神からの権威」について話をしていました。今日はその続きですので、ここで出てくる「彼ら」とは、それらの人々を指しています。

たとえに出てくるぶどう園には、垣や搾り場、見張りのやぐらが造られました。それらの建造物を準備するのは地主の責任でした。このたとえの中でぶどう園はイスラエル、主人は神さまであると考えられるので、神さまはイスラエルに対して十分に手を入れたということを意味しています。

当時のパレスチナはローマ帝国の支配下にあったため、ユダヤ人以外の方がガリラヤの土地を所有しているという状況は、珍しくなかったでしょう。主人が農夫に任せてその土地を離れるということも、多くあったようです。

12:2 (そして) 収穫の時になった (がきた) ので、(彼は農夫たちから) ぶどう園の収穫を受け取るために、僕 (奴隷) を農夫たちのところへ送った (遣わした)。

農夫は自分のものではない土地で得た収穫のうち、決まった分を借地料として納めるのが一般的でした。地主と小作人という関係です。例えば日々かかる出費は農夫が負担し、収穫の四分の一から二分の一を地主に納めていたという契約もあったようです。

土地の状態や作物の種類によって農夫の取り分や支払い方は変わりますが、共通していることが一つあります。それは「借りた土地で農業をしているのだから、地主にはなんらかのものを支払わなくてはならない」という大原則です。

主人は当たり前のように、自分に仕えている奴隷を農夫の元に遣わします。土地を貸すだけでどこかに行ってしまった主人に対し、働かされてなお搾取される農夫は怒って当然だとする考え方もあります。しかしそんなことを言っていたら、当時の社会状況を全く無視することになります。農夫は収穫を渡すのが当然なのです。

12:3 だが、農夫たち（彼ら）は、この僕（奴隷）を捕まえて袋だたきにし（打ち叩き）、何も持たせないで帰した。

最初の奴隷は、打ち叩かれ、何も持たされないで帰されました。袋叩きというのは、少しオーバーな表現です。しかし農夫は主人の奴隷の言葉を無視し、しかも暴力を振るったのです。



この「奴隷」とは、旧約聖書に出てくる預言者のことだと考えられます。イスラエルの民に対して、神さまはイザヤやエレミヤ、エリヤやエリシャといった預言者を遣わしましたが、その言葉は無視され、預言者はひどい目にあわされていきました。

12:4 そこでまた、（彼は彼らの元に）他の僕（奴隷）を送った（遣わした）が、農夫たち（彼ら）はその（彼を、）頭を殴り、侮辱した。

主人は続けて奴隷を農夫の元に送ります。主人を神さまだと考えると、神さまは粘り強くイスラエルに悔い改めを呼び掛けているという構図が浮かび上がります。

ここに「頭を殴る」という表現が出てきますが、「頭」からこれは首を切られた洗礼者ヨハネのことだという人もいます。しかしそこまで飛躍するのは難しいと思います。

12:5 更に（そして）、もう一人（他の者）を送った（遣わした）が、（彼らは）今度は（その者を）殺した。（そして）そのほかに多くの僕を送った（遣わした）が、（彼らは）ある者は（を）殴られ（り）、ある者は（を）殺された（した）。

ここまでくると、現実にはあり得ない話になっていきます。二人の奴隷がボロボロになって帰って来たら、普通主人は怒ると思います。しかし主人は、さらに奴隷を農夫の元に送り続けます。

ルカ福音書はこのマルコの記述はあんまりだと思ったのでしょうか。送られた奴隷は三人にとどめ、しかも一人も殺されていません。

しかしイスラエルは、神さまの遣わす預言者を次々と弾圧し、殺していきました。それが聖書の歴史です。そのことは、農夫が主人の奴隷を弾圧し、殺していくのと同じように、理解しがたい出来事なのです。

12:6 まだ一人、(彼の) 愛する息子がいた。『わたしの息子 (に対して) なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に (彼らの元に) 息子を送った (遣わした)。

農夫たちは、反逆者です。悪人です。しかし主人はさらに、息子を送ろうとします。この決断は無謀なものにみえます。しかし主人は農夫に、最後のチャンスを与えるのです。

この主人の姿に、神さまの忍耐と愛とを見ることができます。「敬ってくれるだろう」という主人の思いは、イスラエルに対する神さまの大きな期待を強調しています。

イエス様がわたしたちの間に宿られたこと。それは神さまの無謀な決断であり、非現実的なことだったのでした。

12:7 (しかし、かの) 農夫たちは話し合った (お互いに言った)。『これは跡取りだ。さあ、(彼を) 殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』

案の定、息子も敬われることはありませんでした。息子が行ったからといって、農夫たちが収穫を渡すことはありませんでした。

実際には主人はまだ生きていたので、息子を殺したとしても財産が自分のものになることはありません。同じように、神の子を拒絶しても、自分たちが神さまにかわってすべてを支配することはできないのです。

12:8 そして、(彼らは) 息子 (彼) を捕まえて殺し、ぶどう園の外にほうり出してしまった。

そして農夫は、息子を殺してしまいます。これはイエス様が祭司長、律法学者、長老たちに殺され、捨てられるということを意味します。つまりイエス様は、ここでも受難予告をしているのです。

預言者を否定し、殺し続け、最後には神さまの独り子であるイエス様まで殺してしまう。そして自分たちの囲いの外に放り出してしまった。それがイスラエルの姿です。



12:9 さて、このぶどう園の主人は、どうするだろうか。(彼は)戻って来て農夫たちを殺し(滅ぼし)、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない(だろう)。

最初に取り上げたイザヤ書によると、神さまがイスラエルの地に見たものは、正義ではなく流血でした。まさしくこの旧約の預言がイエス様の死によって成就するのです。

神さまは自分が与え整えた地で収穫しておきながら、それらをすべて自分の物にしようとした農夫からぶどう園を奪い返します。そしてそれをほかの人たちに与えます。わたしたちはこれを聞くと、「当たり前だ」と感じることでしょう。

このときイエス様は、農夫はイスラエルの指導者、ほかの人たちはイスラエルの群衆として語ったのかもしれませんが。またマルコ福音書が書かれた時代には、農夫はユダヤ人、ほかの人たちは異邦人というように理解が変わっていったと思います。

では今はどうなのでしょう。わたしたちはこの農夫のようになっていないか、考える必要があると思います。すべては自分たちのものだから、収穫を渡す必要はないと勘違いしてしまうと、わたしたちの恵みはほかの人たちに与えられるのです。

12:10-11 (あなたたちは) 聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか。『家を建てる者(家造り)の捨てた(廃棄した)石、これが隅の親石となった。これは、主がなさったことで、わたしたちの目には不思議に見える。』

この言葉は、詩編 118 編 22～23 節「家を建てる者の退けた石が 隅の親石となった。これは主の御業 わたしたちの目には驚くべきこと。」から取られています。隅の親石とは、土台の石のことです。捨てられたはずの石が、建物を支える上で一番重要なものとなるのです。

9 節で捨てられたはずの息子、つまりイエス様が、一番重要な石となり、すべてを支える基盤となるのです。使徒書にもイエス様を「石」になぞらえて語っている箇所はかなりあります。たとえばペトロの手紙一 2 章 6～8 節には次のようにあります。

聖書にこう書いてあるからです。「見よ、わたしは、選ばれた尊いかなめ石を、シオンに置く。これを信じる者は、決して失望することはない。」従って、この石は、信じているあなたがたには掛けがえのないものですが、信じない者たちにとっては、「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった」のであり、また、「つまずきの石、妨げの岩」なのです。彼らは御言葉を信じないのでつまずくのですが、実は、そうなるように以前から定められているのです。

12:12 (そこで) 彼らは、イエス(彼)が自分たちに当てつけてこのたとえを話された(語った)と気づいた(知った)ので、(彼らは)イエス(彼)を捕らえようとしたが、群衆を恐れた。それで、イエス(彼)をその場に残して立ち去った。

イスラエルの指導者たちは、イエス様が何を言おうとしているのか分かりました。しかしそれは救いに至る理解ではなく、裁きに至る理解でした。彼らはイエス様を捕らえようと試みます。

結局彼らはぶどう園の農夫と同じように、ぶどう園の収穫を主人に返そうとはしませんでした。恵みはすべて自分たちのものだと考え、神さまから全権が与えられていると思っていたのです。イエス様と彼らとの溝は、決定的なものとなりました。

<今日の箇所から>

イスラエルがイエス様を拒絶したため、その福音は全世界へと広がった。そのような考えは、いわゆる聖書の解説書に多く見られるものです。確かにイスラエルの不信仰のためにイエス様は十字架につけられたというのも事実です。

しかしぶどう園の農夫に自分をなぞらえたときに、この物語は決して昔話ではなく、また他人事でもないことに気づかされます。

わたしたちは神さまからたくさんの賜物を与えられています。その賜物を使って、わたしたちは本当に多くの恵みを得ています。しかしその恵みを自分の力で得たものだと思い込んでしまい、神さまにお返しすることが出来なかったら、わたしたちはこの農夫と同じなのです。

賜物をいろいろな言葉に置き換えてみましょう。お金、時間、愛、仲間、などなど。それらのものは一方的に神さまから与えられているということを忘れないようにと、イエス様は警告されています。

一方で神さまの忍耐強さにも注目したいと思います。何度奴隷を殺されても、独り子を与えてくれる神さま。その愛を思い起こすときが、クリスマスです。紫の期節に自分を振り返りながら、それでも与え続けてくださる神さまの思いを感じていきたいと思います。

今回の学びはこれで終わります。次回は12月22日(金)10時30分からです。「神の物は神へ」(マルコ12:13~17)について学んでいきます。